

30代教師の転

起
んでも
きる!

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める!



効率的に知識を与える授業から 生物の知識と日常生活を結ぶ授業へ

長野県野沢北高校

小川智道先生

38歳

私が乗り越えてきたもの

進学校の進度を守ろうという焦り

生きとし生けるものを研究対象とし、生命の神秘に迫る学問、生物学。その魅力を生徒の日常に引き付けて解説したいと、教師の道を選びました。31歳で野沢北高校に赴任した時もその考えに変わりはありませんでした。前任の進路多様校の経験を進学校でどう生かせるかが分かりませんでした。「難関大を目指す生徒たちに応えられる教科指導が、自分に出来るだろうか」という不安を抱いていたのです。

不安を打ち消そうと、私は先輩の授業を参考に、教科書の内容を所定の進度で過不足なく伝える工夫をしまし

た。授業で話す内容は教科書から脱線しないようにし、ノートを見直せば試験対策に直結するよう、板書内容も整理したのです。とにかく授業を先へ先へと進めることに集中していました。

知識を定着させられていなかった

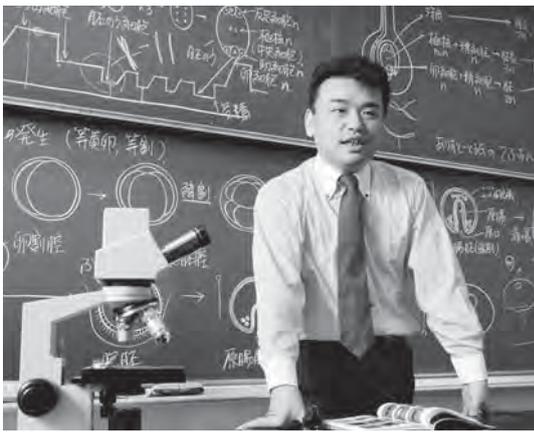
生徒は全員が静かに私の説明を聞き、板書を写していました。そして定期試験の結果も、先輩が担当するクラスの平均点と遜色がなかったため、私は、生徒に力を付けられていると思込んでいました。

ところが直前に教えた概念や現象を

生徒に説明させたところ、自分の言葉で説明できる生徒がほとんどいないことに気付いたのです。定期試験の解答を見返してみると、用語を理解しないまま用いていることによる誤答をする生徒がいることも分かりました。

私は生徒に生物の事象を概念的に伝えられず、暗記に頼った勉強をさせてしまっていたのです。単なる暗記では定期試験で得点できたとしても、本質的な理解には至りません。理解にまで深まっていなければ、難関大の入試で求められる、知識の活用が必要な問題には対応できないでしょう。つまり私は、生徒のためを思いながら、正反對の授業をしていたのです。教師としての力不足を思い知らされました。

暗記に頼った勉強をさせてしまっていた



おがわ・ともみち ◎教職歴13年。同校に赴任して7年目。担当教科は生物。1・3年生担当。
長野県野沢北高校 ◎全日制／普通科・理数科／共学。11年度入試では、国公立大は、北海道大、東北大、一橋大、信州大、京都大などに計108人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、立命館大、関西学院大などに延べ273人が合格。

そして、これからも挑み続ける目標

生活に引き付けた授業を追究

「これまでの指導を根本的に見直さなければならぬ」。そう痛感した私はどこをどう変えるべきかを考えた末、生徒の関心を、生物という教科の持つ本質的な面白さに向けようという結論に至りました。例えば、「体が冷えるとなぜ風邪をひきやすいのか」といった日常生活と密着した話題を、教科書の内容に絡めて必ず話すようにしたのです。まずは生活と深くつながっている意外な事実を伝え、学ぶ意欲を育むことが重要だと考えたのです。話題を生徒にもっと身近なものに出来るよう、毎回の授業で生徒からの質

問を募るようにもしました。そのための用紙を配布し、知りたいことを何でも書くよう伝えました。

少しずつ、生徒が自分の身の回りの事物を生物の視点から捉えた質問が見られるようになりました。例えば、「遺伝子組み換え食品の問題点は何ですか」「羽が2枚の昆虫はハエとカだけだ」と授業で習いましたが、セミの羽も2枚ではないのですか」といった質問が、日に日に多くなっていったのです。生徒の質問に対して私が解説する時間、つまり定期試験には直結しない話をする時間も増えましたが、どの生徒も退屈そうにしていないばかりか、表情は真剣そのもの。「ここは試験に出

るからな」と言った時に寄せられる視線とは異なり、目に知的好奇心が表れるようになったのです。

生徒に考えさせる授業への挑戦

進度を維持しつつ、日常に関連した事象を解説する時間を増やす工夫も重ねました。授業では重要な内容に絞って解説し、細かな用語説明などはプリントにまとめて配布するのです。

野沢北高校に赴任して7年目の2011年度には、捻出した時間を使って、生徒からの質問を紹介した後すぐに私が解説するのではなく、まず生徒に考えさせるようにしています。生徒に意見を聞くと、「DNA研究が進むことのメリットとデメリット」など、簡単

には答えの出せないテーマにも、既習の知識を組み立てて自分なりの答えを導き出していることが分かります。そうした生徒の姿を見て、最近ようやく、生物に対する関心を高める指導が出来始めたかと思えるようになりました。

しかし、教師としてまだまだすべきことはたくさんあります。生徒を引き付ける解説をするには、教師の私がつと幅広い知識を持たなければならぬからです。生物学の最新の研究に目を通すことはもちろん、物理学や化学、更に社会学、歴史学などにも視野を広げる必要性を感じています。これからの、生物の知識と日常生活とをつなげる授業を追究していきたいと思っております。

生物の本質に迫り、関心を高める授業を目指す

小川先生 の 授業実践



Q&A

Q 生物に対する生徒の関心を高めるために、授業でどのような工夫をしていますか？

A 毎回の授業で「質問ペーパー」を配布しています。これはB7判の用紙で、生徒は私に質問したいことを書いて提出します。積極的に質問してほしいので、内容はあえて生物の領域だけに限定しませ

ぬ。生徒からの質問は授業で紹介し、私が解説します。一見授業とは無関係に思える質問でも、生物の知識によって解説できるものはなるべく取り上げます。例えば、「あるマンガの登場人物の体表が緑色なのは葉緑体ですか」という質問には、葉緑体で光合成をしていることを前提にするとどのようなことが推測されるかを話しました。

私が解説する前に生徒に考えさせ、意見を聞くこともあります。これまでの学習内容を活用する練習になると考えています。

Q 限られた時数の中で、生徒の興味を引き付ける時間をどのようにつくっていますか？

A 板書量が多くなる単位では、用語解説などをまとめたプリントを作って配布しています。板書に必要な時間を省略し、その分を、生徒からの質問を解説したり、生徒に考えさせたりする時間に充てようという狙いです。

また板書内容は取り上げる質問の内容や生徒とのやりとりによって変わりますが、必要な知識を伝える役割をプリントに担わせることで、授業進度を維持することも出来ます。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す小川智道先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、小川先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp